mundi
2016 DECEMBER No.39
[ムンディ] 平成28年12月1日発行（毎月1回1日発行） 編集・発行／独立行政法人 国際協力機構
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル TEL 03-5226-9781 FAX 03-5226-6396 http://www.jica.go.jp/
ISSN 2188-0670

私の なんとかしなきゃ！

Vol. 74

被災者に安らぎある住まいを

建築家 坂 茂
BAN Shigeru

Photo by Alex Martinez

PROFILE
1957年、東京都生まれ。84年クーパー・ユニオン建築学部（ニューヨーク）を卒業し、翌年、坂茂建築設計を設立。95年から国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コンサルタントを務め、同時に災害支援活動団体ボランタリー・アーキテクツ・ネットワーク（VAN）を設立。主な作品に「ポンピドー・センター・メス」、「大分県立美術館」など。フランス芸術文化勲章コマンドゥール（2014）、プリツカー賞（2014）、JIA日本建築大賞（2015）など数々の賞を受賞し、日米の大学で教壇にも立つ。写真は2010年のハイチ地震を受け、現地で仮設シェルターを手掛けたときのもの。

先日、地震があったイタリアや鳥取に、避難所内でプライバシーを守る間仕切りの提案に行ってきました。熊本地震では、我々ボランタリー・アーキテクツ・ネットワークと1月に防災協定を結んだ大分県の協力で、2000ユニットの間仕切りを作り、御船町に仮設住宅を建設しました。いずれは全国の都道府県と防災協定を結び、迅速に対応できる体制を作りたいと考えています。

私は小さいころから物を作るのが好きで、家の増改築に来ていた大工さんたちを見て家を作りたいと思い、建築家になりました。しかし、建築家の普段の仕事は、財力や権力がある特権階級の人々のためのモニュメント作りではないか――。そんな疑問を感じ始めたとき、ルワンダ内戦後の難民キャンプの記事を見ました。シェルターは貧弱で、難民たちは雨期になると寒くて震えていました。この人たちのために、自分の知識や経験を生かせないだろうか。そう考えて国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を訪問し、紙管を使うシェルターを提案しました。翌1995年の阪神・淡路大震災では、神戸在住の元ベトナム難民のための仮設住宅や、地域のコミュニティーセンターにもなる教会を、紙管を活用して手掛けました。

ラップの芯や容器などに使われる紙管は世界中どこにでも工場があり、軽いために扱いやすく、値段も安く手に入ります。私は展覧会などで1986年ごろから紙管を使い始め、その後、建築の構造材としての紙管を開発しました。

紙管は工業製品ですから、一定の品質のものを大量に生産でき、海外でもすぐに生産者が見つかるのが強みです。現地で手に入る材料を使い、壊れたときも特別な技術なしで直せるものを提供することが、支援では大切です。

東日本大震災でも仮設住宅や、避難所の間仕切りを作りました。コンテナを利用した宮城県女川町の3階建て仮設住宅に住む人の中には、今後も住み続けたいと言ってくれる人が多くいます。建築家が手掛ける以上、仮設住宅も住み心地が良く、美しく、安らぎを与えてくれる家でなければなりません。

私は、仮設住宅などを建てるときは必ず自分で下調べをし、施工にも立ち会うことにしています。現地の気候や生活習慣、文化などへの配慮なしに作っても、有効に活用してもらえません。スリランカで仮設住宅を建てたときは、イスラムの文化では家に男性の訪問者があったとき、女性は身を隠さなければならないことを知り、カーテンで仕切りを作って対応したことがあります。

日本は平和で住み心地の良い国ですが、世界が平和にならない限り、日本の住み心地を維持することはできません。いつか、世界の全ての地域を車で旅することができるような、平和な未来が来ることを夢見ています。

「なんとかしなきゃ！プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索